

巻頭言

賢者は歴史から学び、 愚者は経験からしか学ばない

“Fools learn from experience. I prefer to learn from the experience of others.”

宮城大学食産業学部教授 三石 誠司

高校時代に学び現在でも覚えている言葉に、「愚者は自分の経験から学ぶ。私は他人の経験、つまり歴史から学ぶ方を選ぶ」という名言がある。これは19世紀末、ドイツ帝国の初代鉄血宰相として活躍したビスマルク（Otto von Bismarck, 1815-1898）の言葉である。

ビスマルク本人に対する評価は別として、2012年の始まりに当たり、我々はこの言葉の持つ意味をもう一度深く考えてみるべきだと思う。昨年3月11日の東日本大震災は、それまで穏やかな平和の中にいた我々の日常がいかに自然の脅威に対して脆いものであるかを強烈に印象づけた。大震災からほぼ1年を経過してもなお、わが国は依然として復旧・復興に向けて国をあげて取り組まざるを得ない状況である。四季豊かなこの日本列島に住み続ける限り、地震・津波・原発という3つの脅威との「共存」を、今後未来永劫にわたり考え、実践し続けていかなければならない宿命にあることを国民のほぼすべてが明確に認識したからである。

近年のわが国の大災害だけを振り返ってみても、北海道南西沖地震（1993年）、阪神・淡路大震災（1995年）、三宅島雄山噴火（2000年）、新潟県中越地震（2004年）などがあり、目を海外に向ければ、1990年以降、マグニチュード8以上の主だった地震だけでもボリビア地震（1994年）、チリ北部地震（1995年）、インドネシア東部地震（1996年）、インドネシア・スマトラ沖地震（2004年、2005年）、中国四川大地震（2008年）、チリ中部地震（2010年）などが発生している。災害に対して立場の違いはあっても、これらの脅威が既に避けられないものであるならば、我々はどう対応していくべきであろうか。

例えば、今回の東日本大震災では、地震や津波といった従来型の災害に加え、我々の日常を支えるインフラでもあり、先端科学技術を駆使した原発ですら多大な影響を免れ得ないということが明らかになっている。

さらに、従来、こうした現代型の災害による影響と、その後の復旧・復興過程に関する実証的な調査研究は、地震学のような直接的に関係している分野に集中していたため、今回のような災害の場合、被

災地としては先行事例の教訓を活かすよりは、どうしても「自分の経験から学ぶ」アプローチを採用した点が多かったのではないだろうか。

これは農林水産分野も例外ではない。災害研究、災害からの復旧・復興過程の研究は科学分野全体として見れば多々あるが、農林水産分野の専門家による実績は依然として数が限られている状況である。

しかしながら、大規模な自然災害からの復旧・復興の過程では、多くの類似状況が各所で登場するため、調査研究の成果に基づき戦略的な政策対応が可能な領域であることも事実である。

こうした視点から今後のわが国の農林水産政策研究の全体を見た場合、新たな研究領域として、わが国および世界各国の自然災害とその復旧・復興過程を農林水産業との関係から捉える形で調査・分析し、現実の復旧・復興過程だけでなく、将来的にもそして他国においてもロールモデルとなるような共通事例の抽出と教訓の普遍化を早急に行うことが、今まさに求められているのではないかと思う。

既に、農林水産政策研究所では過去の復興事例等の分析に着手し、一定の成果を挙げていると聞く。その中には、災害からの復興を活用して、地域の担い手確保や新たなコミュニティが形成された事例などもある。逆に、災害により高齢化や担い手不足が深刻化した事例もあると思う。それらを一刻も早く一般に共有できる形にまとめ、政策に活かすことこそが、同じ過ちを繰り返す愚を避けることに繋がる。

人間は完全なる賢者には成り得ないかもしれないが、少なくとも先行事例から学び、それを国や地方自治体、そして実際の生活レベルで活用していくことは可能であろう。農林水産政策研究所とその研究刊行物が、現在の我々だけでなく、後の世代にとっても有益な教訓と示唆を提供するものであることを強く望む次第である。

